

事業名称	関西圏大学ミュージアム連携活性化事業 ようこそ大学ミュージアムへ 一つなぐ・つなげる・つながるー			
実行委員会	かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会			
中核館	関西大学博物館			
	住所	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35		
	TEL	06-6368-1171	FAX	06-6388-9928
	ホームページ	http://kansai-u.ac.jp/MUSEUM		
構成団体	追手門学院大学附属図書館宮本輝ミュージアム、大阪青山歴史文学博物館、大阪医科大学歴史資料館、大阪大谷大学博物館、大阪音楽大学楽器資料館、大阪芸術大学博物館、大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館、大阪商業大学商業史博物館、大阪商業大学アミューズメント産業研究所、大阪大学総合学術博物館、関西大学博物館、関西学院大学博物館、滋賀大学経済学部附属史料館、常翔歴史館、園田学園女子大学近松研究所、奈良大学博物館、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室、和歌山大学紀州経済史文化史研究所			
事業開始時点の課題分析	<p>平成 25 年度に文化庁補助金の採択をうけ、関西圏にある大学の博物館・美術館・文学館などが集いネットワークを組織し、以降 5 年間、「大学の扉を開く」をキャッチコピーに、緩やかな連携でもって 17 大学 18 館が集い、様々な事業を展開してきた。</p> <p>地域からは、一過性に終わらない、個々の持ち味を活かした連携事業のさらなる展開が求められている。今後は「つなぐ・つなげる・つながる」をキャッチコピーに、各々が保有する人的資源や所蔵資料を有効に活用して、いかに文化資源の可能性を追求することができるかが課題である。大学ミュージアム間の連携を越えて、地域の中核として、学生や地域住民を巻き込んだ積極的かつ能動的な事業展開を推進することで、課題解決の道をさぐりたい。</p>			
事業目的	<p>本事業の目的は、関西圏内に在る「大学」が設置する博物館や美術館等のミュージアム（以下、大学ミュージアム）を地域の核として、個々の大学が保有する人的資源や所蔵資料を有効活用して、地域に根ざした文化遺産を検証し、それぞれの存在価値や可能性を広く地域や組織に広めることである。その目的を推進するために、個々の大学ミュージアムが連携してネットワークを組み、定期的に意見交換会を開催し、構成員の研修・研鑽の場を設けるなど相互に活性化しながら、文化遺産の理解とその継承に向けた事業に取り組んでいる。</p> <p>円滑な連携事業を実施し、大学ミュージアム自体が地域の核として積極的に情報発信を行い、その成果を大学・地域の双方向で共有し活用できるようにすることで、文化力の底上げを推進していきたいと考える。</p>			
事業概要	<p>本事業は、連携館の特徴でもある大学の特性を活かし、地域社会に向けた知的・文化的情報の発信拠点として、次のとおり事業を実施した。</p> <p>「1 大学ミュージアム活用のための各種行事」では、連携館相互の交流と研修のために 4 回の実行委員会を開催し、それぞれの館園の特徴を多言語で発信するための検討に入った。また、ネットワーク全体事業として、スタンプラリーを行った。さらに、所蔵資料や館の特長を組み合わせ、「伝達」をテーマにしたユニークな連携講座を、大阪音楽大学楽器資料館と大阪芸術大学博物館、関西大学博物館の 3 館が連携して開催した。「2 関西における文化遺産の検証」では、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室と大阪商業大学商業史博物館が中心となって、「近代遺産」と「伝統文化」の双方を対象に“もの”と“人”との記憶をつなぐ事業を実施した。具体的には、生活に根ざした「日用品」「はかり」をテーマに 2 か所で展示会(自己資金)を開催し、さらに、2 回のシンポジウムを実施して成果を公開した。「体験講座」では、和歌山大学紀州経済史文化史研究所と関西大学博物館が共働して、上方音楽と田辺祭の囃子を聞き比べ、上方と紀州の文化的なつながりについて検討する体験講座を実施した。</p> <p>各館園で所蔵する史資料や人的資源を活用して、ネットワークの活性化を図る一方で、関西圏固有の文化遺産の検証に取り組んだ。大学ミュージアムとして、学生の参加を促し、連携館相互の人材・資材・情報を活用して、地域と社会とともにつながる文化事業を推進した。相互に「つながる」だけでなく、新たなテーマや人を「つなげ」ていく事業となった。</p>			

<p>実施項目</p> <p>・</p> <p>実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <p>■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携</p> <p>□イ ユニークベニューの促進</p> <p>□ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館</p> <p>■エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信</p> <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <p>□ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成</p> <p>□イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発</p> <p>■ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施</p> <p>□エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業</p> <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <p>□ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動</p> <p>□イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>平成 25 年度に 11 大学で始めたかんさい・大学ミュージアム連携実行委員会は、その事業を引き継ぎ、平成 30 年度からはテーマを「ようこそ大学ミュージアムへ 一つなが・つなげる・つながる」とした。</p> <p>平成 30 年度の成果は、個々の館園が自分ごととして積極的につながりを築き、主体となって各種の事業を実施したことである。大阪音楽大学楽器資料館の発案で「伝達」をテーマにした連携講座を開催したが、3 館の特色を踏まえたユニークな講座であった。また、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室と大阪商業大学商業史博物館は「普通のもの」のなかから「日用品」と「計量器」に焦点をあてて開催した公開シンポジウムでは、身近なものの歴史や自分自身との向き合い方にまで話が広がり、展示した「もの」を媒介に輻輳的な見方を提案することにつながった。和歌山大学紀州経済史文化史研究所と関西大学博物館が共働した体験講座では、大阪と和歌山の距離を越えて、「上方音楽」というテーマでつながることができた。それぞれの館園が中心となって多角的につながることによって、結果的にこれまでにない視点をもつ事業展開につながった。</p> <p>また、地域の方々からの要望もあったが、当初予定になかったスタンプラリーを、連携館の全体事業として継続したいと実行委員会の席上で発議されたときは、これまで緩やかに連携してきた延長線上に、18 館の一体感が生まれていたことを実感した。</p> <p>個々の連携館の個性を尊重して、それぞれを個別に知ってもらえるような事業も並行して実施してきたことが功を奏してか、スタンプラリーに参加した方からの感想として、「展示内容がおもしろい（興味深い）」や「丁寧に説明してもらった」「ゆっくりと見ることができた」「入館料が安い（無料）」「学食で食事をして学生気分を味わうことができた」などがあがっており、大学の付置機関ならではの特長を肯定的に捉えてくれているがわかる。「大学ミュージアムはおもしろい」ということが社会に少しずつ広まっており、ネットワークとしての活動もさることながら、個々の館園をマスコミに取り上げてもらうことも増えてきた。事業の効果が現れたものと考えている。</p> <p>これからも、大学ミュージアムのそれぞれ特長を発信することで、その個性をぶつけあい、つながり、このネットワークならではの、文化財を活用した地域共働の創造活動や関西の魅力の発掘・発信に取り組んでいきたい。</p>

## 【事業実績】

### 1. 大学ミュージアム活用のための各種行事

#### (1) 啓発事業

##### ①-1 実行委員会の開催（4 回）

実行委員会の開催にあわせて研修会を行い、円滑な情報交換や協力体制を築くことができた。

第 2 回実行委員会 9 月 11 日（火）14：30～17：00  
 於：関西学院大学梅田キャンパス 1406 教室  
 出席：9 館 18 名出席  
 研修：「関西学院大学博物館の活動 展示を中心に」  
 関西学院大学博物館 河上繁樹 館長



①-2 スタンプラリーの実施（会場：ネットワーク全館）（期間：9月～翌1月 達成者 4名）

地震等自然災害の影響等もあって開館日数を減らす館園があったが、スタンプラリーのルールを簡素化して実施した。リピーターの存在を実感することができた。

①-3 多言語パンフレットの作成

2019年ICOM京都大会や2020年東京五輪・パラリンピック、2025年大阪万博など海外からの訪日者の対応を目的に多言語化プロジェクトに着手した。

①-4 SNSを通じた発信 **Facebook** かんさい・大学ミュージアムネットワーク

<https://www.facebook.com/%E3%81%8B%E3%82%93%E3%81%95%E3%81%84%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%A2%E3%83%A0%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF-340602059711689/>

② 大阪音楽大学楽器資料館・大阪芸術大学博物館・関西大学博物館の共同企画 連携講座「伝 達」

日時：10月27日（土）15:00～16:30

会場：大阪音楽大学ミレニアムホール 参加者：62名

大阪音楽大学楽器資料館が伝達の道具として楽器を紹介し、大阪芸術大学博物館では「写真」を題材に視覚情報での伝達を分析、関西大学博物館は考古学資料からみる「伝達」の技を「心の進化」と捉えて講演した。3館の特色を踏まえたユニークな講座となった。



アルペンホルン4重奏演奏：S HORN QUARTET

2. 関西における文化遺産の検証

(1) 近代遺産の発掘と活用～日用品～

武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室と大阪商業大学商業史博物館は「普通のもの」のなかから「日用品」と「計量器」に焦点をあてて自己資金で展示会を開催した。公開シンポジウムでは、身近なものの歴史や自分自身との向き合い方にまで話が広がり、展示した「もの」を媒介に輻輳的な見方を提案することにつながった。

① 公開シンポジウム「なぜ普通のを調べるのか」

日時：11月28日（水）15:00～17:40

場所：武庫川女子大学 学術研究交流館1階ホール 参加者：48名



左から、市橋芳則氏（昭和日常博物館館長・学芸員）、池田治司氏（大阪商業大学商業史博物館学芸員）、佐藤浩司氏（国立民族学博物館准教授）、安藤明人氏（武庫川女子大学教授）

② シンポジウム「はかりの文化史」

日時：11月17日（土）14:00～16:30

場所：大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天 参加者：59人



左から コーディネーター池田治司氏（大阪商業大学商業史博物館学芸員）、吉村英祐氏（大阪工業大学教授）、土田泰秀氏（東洋計器株式会社取締役社長、東洋計量史資料館館長）、今西正則氏（前大阪市経済戦略局産業振興部計量検査所所長）、横川公子氏（武庫川女子大学名誉教授・同大学附属総合ミュージアム設置準備室長）

(2) 伝統文化の発掘と活用～祭礼と音楽～

和歌山大学紀州経済史文化史研究所と関西大学博物館が共働した体験講座では、大阪と和歌山の距離を越えて、「上方音楽」というテーマでつながることができた。子供たちの参加も多く、「田辺」という地域が大切に文化を育てている実体に未来展望が開けた。

① 体験講座「長唄と田辺祭の囃子」

日時：11月23日（金・祝）16:30～18:30

場所：和歌山県立情報交流センターBIG-U 参加者：約60名



「内囃子」田辺祭保存会南新町  
以 上